

群 教 セ	G01 - 03
	平14. 205集

「読み語り活動」を取り入れた 国語科指導の工夫

— 自信をもって読み深めていく生徒を目指して —

長期研修員 小野 和好

I 主題設定の理由

「読むこと」に関する生徒の実態として思い浮かぶのが、四月に新しい教科書を目にした生徒の様子である。教師が要求するまでもなく、生徒は思い思いのページをめくり教科書を読み始める。題名から選んで読み始める生徒、挿絵をきっかけに読み始める生徒など、生徒が興味や関心をもって本と出会おうとし、読むことを楽しもうとしている様子がそこにある。

しかし、こうした生徒の興味や関心を日々の授業で生かしているかについては課題がある。「生き生きと初読はするが、授業が進むにつれて飽きてしまい、深く読もうとする姿が少ない。指名されれば答えるが、自ら表現をたどって自問自答する姿が少ない。読後に自分の想像や考えを自信をもって言う生徒が少なく、『同じです。分かりません。』のような個の思いが見えづらい答え方が多い。読書を生活の一部としている生徒が少ない」などの姿に、生徒の興味や関心を生かしていない様子を、指導者として感じているからである。

主題追求型授業では、教師のとらえた主題を生徒に伝達し、理解に導くことが目標とされることが多かった。課題を教師側で用意することが多いため、主題理解の効率化を図れたことは事実である。しかし、生徒一人一人の読みたい部分に時間をかけられず、生徒の多様な発想を生かすことが不十分であった。このため生徒は自分にとって必要な読みであることを実感しづらく、自分の思いを伝え合うことにも消極的であった。結果として、新鮮な気持ちで読み始めたにもかかわらず、読み深めていく意欲や態度を育てられなかったと考える。

これらの実態と考察から、一人一人が題材を読み深めていくためには、「生徒の興味や関心

を生かすこと、読み深めていく必要性を生徒自身が感じること、読みの深まりを生徒自ら実感できること」が重要であると考えた。

そこで、学習の基本的なサイクルを「一人読み（個）→相互読み（班）→まとめ読み（個）」としようと考えた。読むことは本来一人一人の個人内活動である。したがって、生徒の興味・関心を生かすためには、一人読みの時間を保障し自分の読みをもつことが大切である。しかし、一人読みだけでは読みの深まりを自覚しづらい。そこで、友人と読みを比較する相互読み活動を取り入れていく。この相互読みは、読みの相違を気付き合うことで、新たな読みの視点などを知り、一人読み以上に読みを広めたり深めたりしていく活動である。最後のまとめ読みとは、広めたり深めたりした読みを、自分の思いを中心に一人でまとめ直していくことで、自分らしい読みを作り上げていくことである。このサイクルの中で、生徒が自他の読みが互いの読みの深まりに欠かせないと気づき、読みの深まりを実感し合うことで、自信をもって読み深めていく生徒が育っていくものとする。

このサイクルを貫く言語活動として読み語り活動を取り入れていく。読み語り活動は、理解した内容を表現に生かす活動であり、読み語りの発表活動をするために、理解を深めなければならない必然性のある活動である。生徒は、自分のみならず、聞き手も十分に本を楽しめるような読みの段階を目指しながら、読み深めの必然性を実感し、読み深めを生かす期待感をもてるのである。なお、読み語り活動という名称は、社会活動として行われている読み聞かせ活動の中で、特に生徒の読む力や学ぶ意欲を育てる授業手立てとして位置付けた名称として使用している。

このような考えから、読み語り活動を取り入

れて読み進めることで、一人一人が読みを深める資質や能力を養い、読み深めていこうとする意欲や態度を育てることができると考え本主題を設定した。

II 研究のねらい

「読むこと」の学習指導において、一人一人が自信をもって読み深めていく資質や能力を育て、その意欲や態度を伸ばしていくために、読み語り活動を取り入れることが有効であることを実践を通して明らかにする。

III 研究の見通し

- 1 つかむ過程において、読み聞かせを聞く活動を取り入れることによって、作品の主題や読み手の思いを自分なりにとらえることができ読み手となる課題や手がかりをつかもうとしていくであろう。
- 2 深める過程において、読みの相違に気付ける友人との相互読み活動を取り入れることによって、新たな読みの視点を知ったり、読み表し方の多様さを知ることができ、一人読み以上に自分の読みを広げたり深めたりしていくであろう。
- 3 まとめる過程において、読み手としての自分の思いを中心に読みまとめる活動を取り入れることによって、読み手を目指して読み深めてきた読みの深まりを自分で確認することができ、読み深めてきたことに自信をもつことができるであろう。

IV 研究の内容と方法

1 研究の内容

(1) 自信をもって読み深めていくとは

読み深めていくとは、前述した学習サイクルを経て読みの質が高まっていくことである。読み語り活動は、理解した内容を表現に生かす活動であり、読み語り活動をするためには内容理解を深めていく必然性をもつ活動である。その

ため「読むこと」の指導事項で示されている「内容を理解するとともに自分の表現に役立てること」の指導に効果的である。具体的には「Cア語句の効果的な使い方、Cイ論理の展開のとらえや内容理解、Cウ表現の仕方や文章の特徴、Cエ文章を読んでの自分の意見」などの理解を読み語り表現に役立てていくことになる。ただし、題材である本は生徒が自分の興味・関心にそって選ぶため、上記の指導事項は生徒の実態と選んだ本の内容や表現の特徴などによって重点化していく必要がある。

自信とは、読み深めていく活動の過程で、読みの広がりや深まりを自ら肯定的に認められることによって得られる、読みへの自己肯定感ととらえる。この自信が、次の読みへの意欲や態度となっていくと考える。

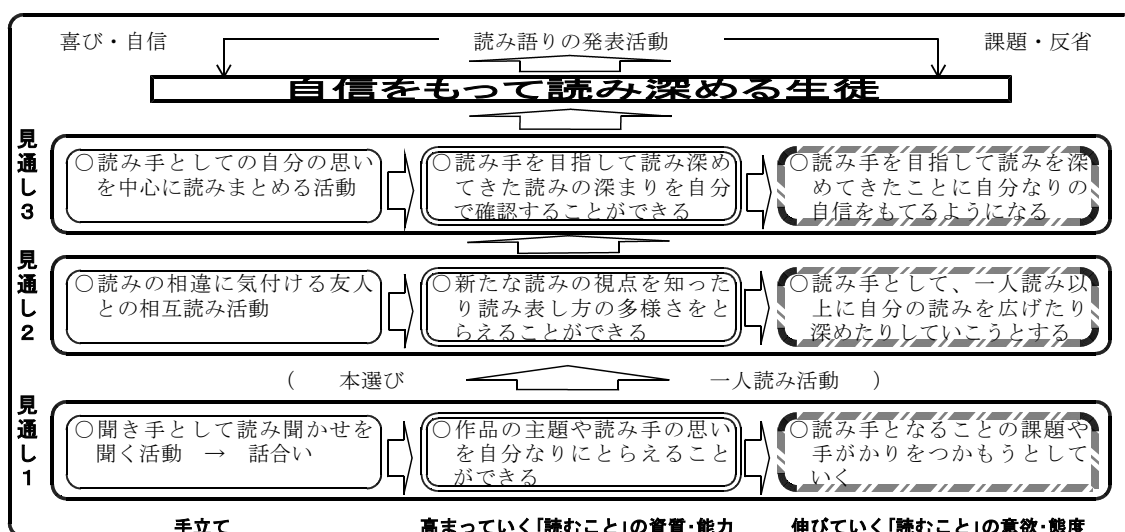
(2) 読み語り活動について

本研究の読み語り活動とは、「読み聞かせを聞く活動・本選び活動・一人読み活動・相互読み活動・まとめ読み活動・読み語り発表活動」の全てのことを言う。

読み語り活動は、生徒が読み深めていく目的や必然性を持ち続けることができる活動である。読み語りをするとき聞いた時、生徒は「自分の読みが聞き手に喜ばれたらいいな」という期待感と、「よい読みができなかったら…。どのように読めばいいのだろうか？」という心配とが同時に起こるに違いない。この読み深めの努力が聞き手の反応にはっきり現れるという状況が、自分のみならず聞き手も本を楽しめる読みの段階へと発展していく必然性を生徒に気付かせるのである。この必然性をもっと読み深めようという意欲を生み、どこをどんなふうに残らいいのかという読みの資質・能力を高めていく原動力となるのである。

本研究では、生徒自身が読みたい本を選ぶ。本を選ぶということはその本のよさを自分で感じ、そのよさを聞き手に伝えるということである。したがって、作品の主題や読み手としての思いは、その生徒自身のものである。友人や指導者との学び合いを通して、読み手としての思いを広げたり深めたりした後も、自分の読みを集約・焦点化して、目の前の聞き手に伝えるのは、やはりその生徒自身なのである。このよう

研究構想図



に一人一人の読みを基に、高めて、表現に生かしていける読み語り活動は、一人一人が自分の読みの深まりを肯定的に認めることができ、読むことへの自信をもつことができるのである。

読み語り活動を支える基本的な力としてコミュニケーション能力がある。読み語りの発表活動において、生徒は聞き手の様々な反応を受け止めながら相互対話的な読みを行う。この活動を通して、生徒はコミュニケーション能力を高め、身に付けていくのである。発表活動以外にも、読み聞かせを聞く活動における、自分と読み聞かせ外部講師（以下、講師）との思いの伝え合いや、相互読み活動における自分と班員との読み深めるための話し合いも、コミュニケーション能力を高めていく活動である。このように、他者の考えを大切にし互いに自分らしさを認め合うコミュニケーション活動を通して、読み深めの自信は生まれてくるのである。

具体的には「読むこと」の学習において、次の活動を行う。

ア 読み聞かせを聞く活動

いきなり読み手としての活動を行うのではなく、聞き手はどのような気持ちで聞いているのかを自分で実感するために、まず読み聞かせを聞き味わう。聞く活動を通して生徒は、作品の主題や読みへの思いだけでなく、講師の人物や読み深めの努力までも考えていくであろう。この時、生徒は自分が感じ取った作品の主題や内容が、講師の思いや読み方とともにあることを

実感していく。この「作品・講師・読みを支える読み深め」の気づきに、講師との話し合いを取り入れる。生徒は読み聞かせていただいた作品の内容(主題)や印象的な言葉などを感想として発表したり、読み手となるための質問や疑問を投げかける。講師は自分が作品に寄せる思いや読み聞かせをする思い、工夫や心掛け、聞き手である園児の実態や反応などを中心に生徒に助言する。この話し合いによって生徒は、作品内容を読み手としてどのようにとらえていくか、園児に自分の読みをどのように伝えていくのかなど、読み手の思いや読み手となる課題を具体的に気付くことができる。これが活動への意欲化につながっていくと考える。

イ 本選び・一人読み活動

生徒は、講師から聞いた園児が読み聞かせを聞く様子、保育園からの情報、生徒がもつ5～6歳児の印象などをもとに聞き手像をつかむ。次に、指導者及び講師が5～6歳児が楽しめると思った絵本(80冊程度)を自由に読む。次に、好きな本で、園児に伝えたいと内容だと判断した本を自分で選ぶ。上記80冊の中に好きな本がなければ、家庭の本や図書館で借りてきてもよいものとする。このように読みの目標を設定し、生徒が自分の関心にそって本選びをすることで、自分で読み進めていこうとする意欲を喚起することができる。また、自分で選んだことが、なぜこの本が好きなのか自問自答することにつながり、本の主題を自らつかもうとしていくの

である。一人読みが進むと「私の本を友人はどのように読むだろう」と思い始め、読みを比べて自分の読みを確かめたいという思いが生じてくる。この思いがさらに読みを広げたり深めたりする意欲となっていくのである。

ウ 友人との相互読み活動

「私の本を友人はどのように読むだろう」という思いを、読みを広めたり深めたりする意欲や態度につなげられるように、友人との相互読み活動を取り入れる。これにより生徒は同じ作品を読んでも読みや読み表し方に相違があることに気付いていく。気付いたことに対して、なぜそのように感じるのか友人に問い返したり、自分はなぜ友人とは違うように感じていたのかと自分に問い直したりしていく。そうすることで作品を読んだ自分の考えや表現の仕方などを視点に、自分の読みを意識して見つめ直すことになり、友人の読みを取り入れながら作品の内容をさらに読み深めていくことになるのである。

エ まとめ読み活動

園児の前で読み語る前に、自分一人で読みをまとめる活動を行う。この読みまとめ活動は、

(1) 研究実践の計画

対象	沼田市立沼田西中学校3年生	教材	生徒の選択	期間	10月中旬～11月初旬	授業者	長期研修員 小野和好
----	---------------	----	-------	----	-------------	-----	------------

(2) 抽出生徒

A男	読むことによって感じたり考えたりしたことに自信をもてないため、それを表に出すことに課題があると考える。根気よく読むことができるので、相互読みやまとめ読みの時に、自分の読みが他者に受け入れられ認められる経験を積むことで自分の読みのよさに自信をもてるようにしたい。
B子	自ら表現をたどって読み深めることに課題があると考え。読み聞かせを聞き、読み手の思いが表現に反映されていることを聞き取ったり、相互読みの時に友人がどんな言葉や表現に留意しているかを知ったりすることを通して、自ら表現をたどっていく大切さや視点を学び、自分らしく読み深めることに自信をもてるようにしたい。

(3) 検証計画

	検証の観点	検証方法
見通し1	読み聞かせを聞く活動(含 講師との話し合い)を行ったことが、主題や読み手の思いを自分なりにとらえることになり、読み手となる課題や手がかりをつかもうとしていく意欲や態度の育成に有効であったか。	・全体、抽出生徒観察 ・ビデオ再生法・質問法・自己、相互評価
見通し2	読みの相違に気付ける友人との相互読み活動を行ったことが、新たな読みの視点を知り、読み表し方の多様さを知ることになり、一人読み以上に自分の読みを広げたり深めたりしていく意欲や態度の育成に有効であったか。	
見通し3	読み手としての自分の思いを中心に読みまとめる活動を行ったことが、読み手を目指して読み深めてきた読みの変容を自分で確認することになり、読み深めてきたことに自信をもつことに有効であったか。	

V 研究の展開

1 単元名 「読み語り」をしよう!

2 単元・題材の考察

優れた絵本は絵と文章とが一体となり、見開き1ページが1場面、展開・構成が明確な文章となっている。無駄なく平易な叙述に徹し、会話描写を効果的に取り入れた作品が多く、漢語表現が少ない点は音声にした時の聞き取りやす

講師が常に心掛けているのと同じように、読み手としての自分の思いを中心に読みまとめていくことである。具体的には、最も伝えたい作品内容(自分がとらえた主題)と、それを読み表すのに必要な表現課題を中心に、活動を振り返りながら静かに一人でまとめていくことになる。この過程で生徒は、作品の主題を自分なりにとらえながら、読み深められてきたという自己肯定感=自信をもつことができるのである。

オ 読み語り発表活動

読み深めを生かし、読み手としての自分の思いを伝える読み語り活動を行う。生徒は本の内容を園児と共有し、園児の反応を介して読み深めてきたことの価値を自覚していく。このことが「読むこと」への自信や意欲となり、次なる「読むこと」への意欲的な姿勢となっていく。

2 研究の方法

一人一人が自信をもって読み深めていく生徒を目指す本研究について、研究の見通しに基づいて、次のような実践によって検証する。

さにつながっている。中学生にとって絵本は、簡単に読める題材と言えよう。しかし、その絵本で園児に読み語りをしようとしたらどうであろうか。通り一遍の読みでは通用しないことに生徒はすぐに気付くはずである。題材が長くて難しいから中学生の教材として適しているのではない。文章に向かい直すことによって、言葉や表現に気付き、深い読みを見い出せるものが教材として適しているのである。生徒は何度も何度も読み返し、平易な叙述の中に凝縮された

深い意味や作者の思いを、改めて見出ししていくことになるであろう。この読みは詩を読み味わう読みに似ている。その理由は、研ぎ澄まされた字句に対して、自分のイメージを膨らませながら読んでいくからである。ここに読む力を育てる題材としての価値があると考えられる。

生徒に提示する絵本は、園児が楽しめる内容、読み深めに適した内容・表現が随所にあることを観点にして指導者と講師とで選定する。生徒はこれらの本をできるだけ多く読み、自分の気持ちに合っていたり、大切にしたいと思う内容

など、自分にとって読み伝えたいと思う本を選ぶ。このように「いい本だなあ、これを小さな子にも分かるように伝えたいなあ」という目的をもって生徒が読み深めていく時、一人読み・相互読み・まとめ読みなどの活動を通して、「読むこと」の力や意欲を効果的に育てることができると考えた。また、読み語り活動を通じて身に付けた読む力や意欲は、詩歌を初め他の文学作品を読む際にも、言葉や表現の深い意味を探り自分の読みを大切にしようとする姿勢につながっていくと考え、本単元及び題材を設定した。

3 目標・評価規準

目標	「読み語りで思いを伝える」ことを読みの表現目標としてみち、読み聞かせを聞く活動、相互読み活動、まとめ読み活動を通して、内容理解を深め、作者の思いや表現の工夫を理解しながら、読むことの資質や能力を身に付け、読み深めていく意欲や態度を高める。		
評価規準	○読み語り活動を通して、読むことを表現や自分の生活に役立てようとしている(国語への関心・意欲・態度)。	○作者の思いや表現の仕方、語句の効果的な使い方を味わいながら、自分の考えをもてるようになる(読むこと)。	○読み語り活動を通して内容・語感・表現の特徴・文体など優れた表現を味わえるようになる(言語に関する知識・理解・技能)。

4 指導計画

◇=(おおむね満足できる状況) (十分満足)=(十分に満足できる状況)

過程	○主な学習活動	時・形態	学 習 へ の 支 援	評 価 規 準		
				国語への関心・意欲・態度	読 む こ と	言語に関する知識・理解・技能
気付く・見直し1	○聞き手として読み聞かせを聞く。 ○講師を交えて話を交わす。 ○再度、読み聞かせを聞く。 ○自己評価。	1 全体	・読み聞かせを聞きやすい会場作り。 ・聞き手の思いを実感することが、読み手を目指して読み深める初めであることを説明する。 ・生徒を3班編成し(講師3名)、質疑や応答の回数を増やせるようにする。 ・質疑・応答の司会を指導者(TT2名)が行い、生徒の発言内容を「本の内容」「読み手に関して」「聞き手について」に整理しながら行う。生徒の発言に対する賞賛の言葉掛けを語り手に依頼しておく(意欲の高揚のため)。	◇読み聞かせを聞き、感想を発表したり質問をしたりしている。 (十分満足)とするキーワード ・集中して、楽しみながら ・「本の内容」「読み手」「聞き手」の話題を整理しながら ・読み手となる目標をもって (努力を要する状況)への方策 ・次の場面を想像したり、講師がどんな思いで作品を読んでいるのかを考えながら聞くように助言する。 ・発表・質問については、ワークシートの記述内容と合わせ個別指導する。	◇読み聞かせを聞き、作品の主題や筆者の思いを自分なりに聞き取っている。 (十分満足)とするキーワード ・筆者の考え方にも触れながら ・自分のものの見方・考え方を広げながら (努力を要する状況)への方策 ・印象深い場面が思い出せばよいと助言し、その場面を確認し自分なりに聞いていたことを認める。	◇読み聞かせ聞き、語感の豊かさを感じた語句を指摘できる。 (十分満足)とするキーワード ・音声の工夫についても自分なりに気付くことができる。 (努力を要する状況)への方策 ・印象に残っている言葉を想起し、なぜ記憶に残るのかを考えるよう助言する。そのことより、同じ言葉でも一人一人によって受け止め方が違うことに自ら気付けるようにする。
深める・見直し2	○前時の読みを基に互いの読みを交流し合う。 ○互いに読み合っけて気付いた点を話し合う。 ○自己評価。	1 班	・読み語りの目的を踏まえた班編成を行えるよう、班分けの条件、班分けの意図や方針のプリント作成し、早くに生徒に提示しておく。また、条件を踏まえた班編成のパターンを用意しておく、班編成の相談・助言にあたる。 ・読みの交流の目的が分かり、交流の観点をもてるように、プリントを提示する。共通点も相違点も共に価値あるものであることを説明し、前向きに話し合えるようにする。 ・後半は音読して上記の内容を確かめ合えるようにする。	◇友達に質問したり、友達の質問に対して自分の考えや思いを伝えようとしている。 (十分満足)とするキーワード ・うなづきや相づちを打ちながら聞いたり、同意を求めたりしながら ・読み相違の理由を考えるために表現に戻り、文の前後を関連させながら (努力を要する状況)への方策 ・聞き手は多様な受け取りをするものだと知らせ、だからこそ自分の思いを大切にしたい読みが重要であることを伝え、活動の意欲化を図る。	◇【深め観点(内容・表現・語感)】にそって、自分なりに読みを広げたり深めている。 (十分満足)とするキーワード ・友人の視点やイメージの相違を知ったことによる読みの変容を大切にしながら ・友人の語調や音読の工夫から気付いた読みの変容を大切にしながら (努力を要する状況)への方策 ・内容の中心、好きな表現部分とその理由を一言で言い、その違いを説明し合うことで読みの相違を讀みの広がりとしてとらえられるようにする。	◇【深め観点(声量・語感・間・速度)】に留意して本を音読できる。 (十分満足)とするキーワード ・聞きやすいように工夫して ・思いを伝える意欲をもって (努力を要する状況)への方策 最も大切にしたい表現の仕方を具体的に考えられるようにする。
まとめる・見直し3	○交流後の読みを再構成し読み手としての思いをまとめ上げる。 ○表現課題に留意し班で練習する。 ○自己評価。	1 個別	・活動全体を振り返り再度一人で読みまとめる主旨を説明する。 ・深まった自分の読みを観点にそってまとめるよう促す。「まとめ観点①一人読みから変容し補充された内容の中核は」「まとめ観点②①を伝えるための自分の表現課題は」 ・音読練習では、園児の椅子を借り、園児とのつながりを自覚できるようにする。また、友人の課題について、工夫点や努力を賞賛できるように聞き、改善点も補足しよう促す。 ・自己評価では個々の思考の流れと意欲を関連させて行う。自信や意欲が自覚できたからこそ生まれた課題も生徒が言い表せる評価項目を工夫する。	◇読みまとめ(課題設定・自己評価)の活動を通して、読みを深めてきたことに自分なりの自信を感じ取れている。 (十分満足)とするキーワード ・読み語り活動全体を振り返りながら ・内容の中核と表現課題とを関連させていくことで ・自信をもつことで発表に向けて意欲を増している。 (努力を要する状況)への方策 ・具体的な表現を例にとり、自分の読み方の工夫や配慮が、聞き手を大切にしたい読みの深まり(変容)であることを知らせて、読み深めの自信を感じられるようにする。	◇【まとめ観点①(内容の中核)】にそって読みの再構成し、自分の読みをまとめ上げている。 (十分満足)とするキーワード ・授業記録や友人・講師の助言を根拠にして ・読みの広がりや深まりを踏まえて ・自分なりに読みの軽重を図ったり、取捨選択をしながら ・自分で設定する表現課題と関連させて (努力を要する状況)への方策 ・今までの活動記録や自分の思いを振り返りながら、「今の自分にとって内容の中核は何か」を口頭で言い、読みの変容を確認しやすくしていく。	◇【まとめ観点②(表現課題)】に留意しながら自分で中心的な表現課題を設定できる。また、具体的な部分で工夫しながら読み表そうとしている。 (十分満足)とするキーワード ・「どこを、聞き手が〜できるように、〜していきたい」の表現課題設定形式を利用しながら ・自分でまとめた内容の中核と関連させて、作品全体に一貫性をもって (努力を要する状況)への方策 ・「どこを、聞き手が〜できるように、〜していきたい」の表現課題形式を利用し、個々に相談活動しながら自分の言葉で記入できるようにする。

「聞き手の想定・本の選択」「一人読み」「読み語りの発表」部分は省略(資料集に記載)

VI 研究の結果と考察

1 つかむ過程において、読み語りを聞く活動を取り入れたことは、作品の主題や読み手の思いを自分なりにとらえることができ、読み手となる課題や手がかりをつかもうとしていくことに有効であったか

読み聞かせの聞き手としての思いをとらえるために、講師を招き、聞き手として読み聞かせを聞いた。その後、講師をはさんで感想や質問を出し合い、読み語りについて話し合った。最後に全員でもう一度読み聞かせを聞いた。

A男は「絵本：くまさぶろう」を聞いて、人の悲しみをぬすんでくれる場面を、自分にとって最も重要な場面を押さえ、A男なりに作品の主題を押さえていると言える(資料1)。さらに授業後の面談で、「うまく読むんじゃなくて、優しく読むことが大切…それならできるかなと思った」と述べ、活動意欲については「普通よりもやる気になったが、そのぶん恥ずかしいだろうなという心配もあった」と述べた。A男は、「恥ずかしさ」の気持ちを抱えながらも、「自分も(本を読むこと)を楽しみながらする。(うまくではなく)優しく読む(資料1)」ということに気付いたことで、自分にもできそうだという見通しや自己課題を見つけられ、意欲化につながったと考える。

B子は「絵本：あらしのよるに」を聞いて、

資料1 A男・B子のワークシート1

- 作品内容であなたにとって印象深い場面・行動・会話などがあつたらメモしよう。
- A男 くまさぶろうを聞いて、ただのどろぼうかと思つたが、人の悲しみをぬすんでくれる場面がよかった。優しく勇気を感じた。
- B子 あらしのよるにでは、相手の顔を知らない方がいいんだなと思つました。いつばれちゃうのかハラドキドキして見てました。
- 「読み聞かせ」を聞いて、聞き手として感じたことを書こう。
- A男 シャベリ方がやさしく感じられ、小さい子たちには、こういう読み語りがいいのだろうと思つました。
- B子 自分一人ではなくて、みんなで聞けるので、いいな思つました。自分で読むと真剣になれないけど、読んでくれると真剣に関われるんだなと思つました。
- 話し合いを通して、語り手が工夫したり努力したり心がけていることで気付いたことを記録しよう。
- A男 読み聞かせをする人は見ている人たちといしょに自分も楽しみながらしていることに気付いた。
- B子 ゆっくり読んで絵をじっくり見せる。何度も何度も読んでおく。怖い顔をしな、ニコニコ顔。

相手の顔を知らない方がいいを自分にとっての主題として押さえ、姿形ではなく本質の大切さ聞き取っていると見える(資料1)。また、ハラドキドキでは、展開の面白さや会話描写を生かした講師の読みを、聞き手として楽しみながら聞いていたことが分かる(資料1)。B子は「今日みたいに読んでもらえると自分には内容が分かりやすい」と授業後に述べている。記述とを考え合わせると、B子は「みんなで真剣に聞ける(資料1)⇔内容が分かりやすい」を感じ取り、「ゆっくり・じっくり・何度も何度も(資料1)」といった読み手の思いや工夫が読み語りを支えていることに気付いている。そして、その気付きを自己課題に位置付けられたことによって、活動への意欲化につながったと考える。

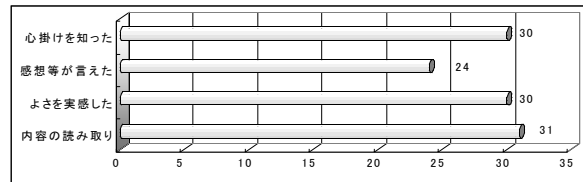


図1 「読み聞かせを聞こう」自己評価(十分到達) 総数31人

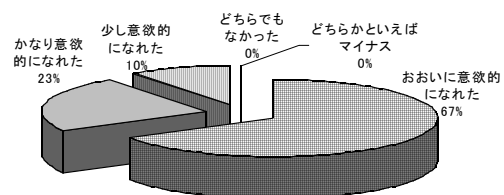


図2 読み聞かせを聞いた活動が読み深めることへの意欲を引き出すのに効果的であったか

図1は、図中4項目のクラス全体の自己評価状況である。各自のワークシートには、各項目とも自分で感じ取った2~3の具体的な内容が記述してあり、そこを自己評価の根拠としていた。これは読み語りの課題や手がかりを自分なりにつかめたことを意味している。結果として、A男・B子のように、自分にもできるという見通しがもて、こうしていくんだという自己課題を見つけることができ、図2に示したような読み深めることへの意欲化が図れたものと考えられる。

これらのことから、つかむ過程で、読み語りを聞く活動を取り入れたことは、作品の主題や読み手の思いを自分なりにとらえることができ、読み手となる課題や手がかりをつかむことに有効であったと考える。

2 深める過程において、読みの相違に気付ける友人との相互読み活動を取り入れたことは、新たな読みの視点を知り、読み表し方の多様さを知ることができ、一人読み以上に自分の読みを広げたり深めたりしていくことに有効であったか

教師が提示した班分けの条件にそって男女混合の10班に分かれ、友人の読み語り用の本を黙読したり読み語り練習をし合ったりしながら、感想や質問を交換し合った。その際、「主題・表現の仕方・語感」を話し合いの方向として焦点化し、読みの相違をより気付けるようにした。

A男は「まっくろネリノ ヘルガ・ガルラー著」を読み語り用に選んでいた。他の班員は「どろんここぶた アーノルド・ローベル著、月のみはりばん とりごえまり著」を選んでいた。授業後に、話し合いで班員に伝えた内容を尋ねると以下のように述べた。「汚いところが好きだなんて変な豚だけどことなくかわいい豚だ。月の満ち欠けのことをダイエットみたいに言っているところが面白い。見張り番は慌てているのに、月はのんびりしているのが面白い。」A男は、「変な・ダイエット」のように自分の言葉を使って、自分の読みを伝えられている。自分の読みを伝えることに課題があったA男が、ここで自分の読みを伝えられた理由は次の3点であると考えられる。①(前時)自分も楽しんで読むという気付き→楽しく読めたところを伝えた。②班員も様々な読みを言っていた→伝えられた(自分にもできそう)。③班員の本がみな違うので気付く点が多かった。A男の発言は、班員のワークシートにも記録された。A男は自分の読みが班員に受け止められたことで、自分の読みを受容される視点や思いがあることを実感できていた。

次に班員から伝えられた内容について次の内容を挙げた。「A男君らしい本だね。もっと大きい声で読まないと聞こえないよ。最初と最後ではネリノ(主人公)が変わってるところがポイントだね」A男は一人読みの時点で、内容のワンポイント記録に「やっぱり兄弟仲良くしたほうがいいと思う」と記しており、今回の記録では「温かい話・ネリノの心」(資料2)としていた。この記録の変容からだけでは、読み深められたかははっきりしていない。しかし、「温かい・ネリノの心(最初と最後の変化)」の言葉

資料2 A男・B子のワークシート3

【内容の中心は何であるか】
A男 最後が温かい話。ネリノの心がよく出ている。
B子 家族のまづなを大切にしているのでもとてもいい。ねずみたちの行動が印象的なところ。
【表現の仕方を大切にしたい部分】
A男 呼びかけるようにした方がいい。初めの部分と後の部分で感情が変わるから、その時の感情を変えるようにする。
B子 がんばれ かぼちゃん を、現実的っぽく読む。

はA男自身の読みであり、単に「兄弟仲良く」だけではない作品の本質を、交流を契機に考え始めていると言える。そこで、見過ごしてしまう言葉や表現を掘りおこすことによって、さらに読み深められると考え、指導者が班の話し合いに参加して支援した(資料3)。

資料3 A男の班の話し合い

T(指導者):「ネリノはどうしてひとりぼっちなの?」
A男:「兄弟が遊んでくれないから。」
T:「それだけかな?」
班員:「父さんと母さんは毎日えさ探して忙しいから。」
T:「つまりどういうこと?」
班員:「忙しくてネリノのことをかまってもらえない。ネリノの悩みに気が付かない。」
T:「うん。ネリノが悲しいなあって考えてるんだというところがあるけど、思ってるんだ、にしたらどう?」
A男:「思ってるんだのほうに悲しそうかな。」
T:「それはどうして?」
A男:「...?」
班員:「考えてるの方がいろいろ何かある気持ちの中の一つという気がするな。」
T:「じゃネリノに、他にどんな気持ちがあるのかな?」
A男:「つまらない。」 班員:「いじける。」
T:「それだけ?」
班員:「何とかしたい。」
A男:「ああ、だから花に色のことを聞いたりしたんだ。」
T:「うん。ネリノってただの寂しがりやじゃないみたいだな。」 以下略

なお、表現の仕方については、班員のはっきりした声、緩急の工夫を聞き、「呼びかけるように・初めと最後で感情を変える」(資料2)の課題を見いだしている。

B子は「14ひきのかぼちゃ いわむらかずお著」を読み語り用に選んでいた。他の班員は「バムとケロのそらのたび 島田ゆか著、もこもこもこ 谷川俊太郎著、しりとりこあら 斎藤洋著」である。「ニョキ・ピコ」などの部分を、班員が声色や強弱を変えながら読むのを聞き、B子はワークシートに「現実的っぽく読む」と記した(資料2)。あいまいな表現ではあるが、班員の読みの工夫が刺激となって、「がんばれ かぼちゃん」

部分(資料2)が、地の文とは違った読みが必要なことに自ら気付いている(課題であった表現をたどって自問自答することができている)。また、「バム～」を選んだ班員が、「冒険ロマン、次に何が出てくるか分からない楽しみ」と自分の言葉で内容を押さえたのに触発されて、「家族の絆」(資料2)と記述している。これは主題を自分で読み取ろうとしていることである。さらに「ねずみたちの行動が印象的なところ」の付記は、自分が気付かなかった部分(絵)を、班員が指摘してくれたからであった。B子がこのような活動ができた理由も、前記②③が強く働いていると考える。B子は活動中発言こそ少なかったが、班員の読みの工夫や視点に気づき、自らの読みに取り入れていたと言える。

「人の読みの相違に気付いたか」に関するクラス全体の自己評価では30名94%が気付けたとなった。これは、A男やB子のように、自分の読みを自分らしく伝え合えられたことであり、友人の読みの視点や工夫・友人らしさに気付いたことを示している。また、気づき合うことで自他の読みを比較でき、新たな読み深めの手がかりを知ることにつながったことも示していると考えられる。このことが自ら読み深めようとする意欲や態度につながったと考える(図3参照)。

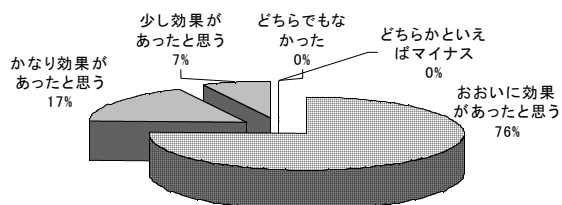


図3 友人との相互読み活動が、本を読み深めていく力を身に付けていくのに効果的であったか

これらのことから、読みの相違に気付ける友人との相互読み活動を取り入れることによって、新たな読みの視点を知ったり読み表し方の多様さを知ることができ、一人読み以上に自分の読みを広げたり深めたりしていくことに有効であったと考える。

3 まとめる過程において、読み手としての自分の思いを中心に読みまとめる活動を取り入れたことは、読み手を目指して読み深めてきた読みの深まりを自分で確認することができ、読み深め

できたことに自信をもつことに有効であったか

一人読み→相互読み→まとめ読みの流れを押さえ、ワークシートに「自分がとらえた作品のよさや筆者思い」と「それを効果的に伝えるための表現課題」を一人で静かにまとめた。その後班別になり、互いの表現課題を確認し合ってから読み語り練習をし、意見交換をした。

今までの記録と資料4とを考え合わせると、A男が、兄弟は仲良くしたほうがよい(一人読み)→温かい話(相互読み)→前向きに考えていくことの大切さ(まとめ読み)の順に内容を読み深めてきていることが分かる。羽の色が黒いために寂しさを秘めていたネリノが、その黒さを利用して兄弟を助けることができるいきさつを、きっかけ・前向きという一般化した自らの言葉でまとめている。これは主題や作者の思いを自分なりにとらえていることである。また表現課題では、前時の「もっと大きい声で読まないと聞こえないよ」という班員の助言を参考に、「(聞き手が)聞き入ることができるように、豊かに想像できるように、感情を込めて、ゆっくり強弱を付けて(資料4)」と課題をまとめられている。「感情を込めて」では、どのような感情を込めるのかを考え始め、「ゆっくり・強弱」では、読み深めてきた思いを伝える工夫を具体的に自らの判断で決めている。

A男の読み練習はたまたまクラスで最後となった。その時のことをA男は次のように述べた。「クラス中の人が集まってきて恥ずかしくなり、読みが速くなった。でも、友達が自分じゃなく絵本を見ていることにも気付いた。読み終わっ

資料4 A男のワークシート4

「右に書いたあなたの思いを、聞き手(班員)に効果的に伝えるために、あなたはどのように伝えたいか」という問いに答えている。

【今までの活動を振り返って、あなたなりの作品のよさや筆者の思いをまとめる活動をしたか】

主人公の苦しみや悲しみに共感し、前向きになる。そのために自分自身で工夫して前向きに考えた方がいい。

【右に書いたあなたの思いを、聞き手(班員)に効果的に伝えるために、あなたはどのように伝えたいか】

全体的に (全体的に) 聞き手が聞き入ることができるように (聞き手が聞き入ることができるように) 会話の感情をいかに伝えるように (会話の感情をいかに伝えるように) 工夫して (工夫して)

【右に書いたあなたの思いを、聞き手(班員)に効果的に伝えるために、あなたはどのように伝えたいか】

ネリノの気持ちをいかに伝えるように (ネリノの気持ちをいかに伝えるように) イメージしやすく (イメージしやすく) 工夫して (工夫して)

きたことに自分なりの自信をもつことに有効であったと考える。

V 研究のまとめと今後の課題

- 今回の研究では読み深めた後の表現目標として保育園での読み語り活動を位置付けた。これにより生徒が読みに目的や必然性を実感できた。また、読みに目的と必然性を自覚できたことが、おおいに意欲的になれた67%、かなり意欲的になれた27%(合計94%)という自己評価に示された意欲化につながった。

また、直接、講師に読み聞かせていただいたり講師と話し合えたことで、生徒は聞き手の思いや目指す読みの姿を具体的にとらえられ、読み手の思い・見通し・課題などを自分なりにつかむことができた。生徒にとって本物を体験することはたいへん重要である。

友人との相互読み活動を取り入れたことで読みに相違があることを実感でき、友人の読み視点や読み表し方などを参考にしながら、自分の読みを広げたり深めたりすることができた。特にA男・B子のように、読み取りに自信をもちづらい生徒には、読みの自分らしさを指摘してもらったり肯定的に受け取ってもらう機会となったことが重要な経験となった。そのことが、読み語り活動への必要以上の不安を消し、一人読み以上に読み深めていこうという意欲を生むことにつながった。

学習のまとめ段階として読み手としての自分の思いを中心に読みまとめる活動を取り入れたことによって、一人読みからの読みの変容を改めて自覚することができた。これにより広げられた読みを自分の言葉で具体的にまとめることができたため、読み深められたことに自分なりの自信を感じることもできた。

- 生徒一人一人が異なった本を使用するため本の内容にあったワークシートが必要であった(ねらいは同じ)。今回は単一であったため記入内容に迷う生徒が見受けられた。絵本では少なくとも「言葉遊び」「対話型動作型絵本」(例「できるかな～つまさきまで」エリック・カール著)「科学的観察絵本」「物語」に合う4種のワークシートを用意する必要があったと考える。これ

は絵本そのものの教材研究と同じである。著者、同一著者の作品群、文体、表現の特徴、絵の特徴など、様々な角度から研究しておく必要がある。この教材研究に関しては、読み聞かせの方々に助言を受けることも必要かつ重要なことである。

最後に読み手と聞き手の異学年交流についてである。今回は中学3年生が保育園児(5・6歳児)に向けて行うことができ効果的であったと考える。生徒の声として「おにいさん、おねえさんという自覚がもてたほうが行いやすい」があったことを踏まえ、様々な年齢間で検証しなければならないと考える。

〈参考文献〉

- ・代田 知子 著 『読み聞かせハンドブック』 一声社(2001)
- ・関 可明 著 『脳が元気になる読み聞かせ』 一光社(2002)
- ・ジム・トレリース 著 『読み聞かせ この素晴らしい世界』 高文研(1999)
- ・村上 淳子 著 『先生、本を読んで!』 ポプラ社(1999)
- ・ブルーノ・ベッテルハイム 著 『昔話の魔法』 評論社(1978)
- ・市毛 勝雄 著 『文学的文章で何を教えるか』 明治図書(1988)